

木は1年に1回実をつけ、それを収穫したあとは、長い冬を越えて再び翌年実をつけます。その実を確実に収穫して、次の収穫に備える準備をし、翌年再び実を収穫するという意味で「金のなる木」と名づけました。  
【3~5年で資金3倍化を目指して】

(ご案内)レポートの名称が長期投資から資産形成に変わりました。内容の変更はございません

## 資産づくりの株式投資の考え方

...過去の株式投資の発想を切りかえよう...

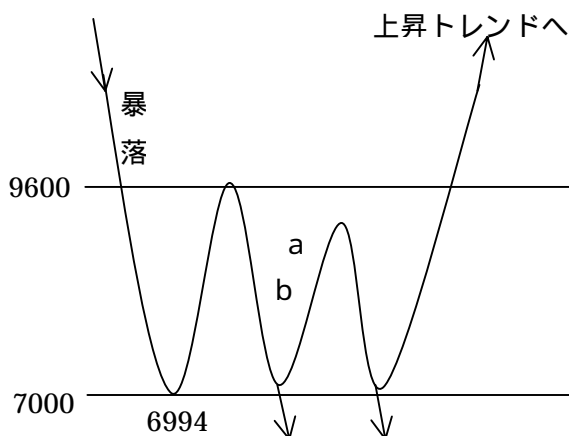
100年に1度の経済危機(金融危機、株価暴落)がこれまでの資本主義社会というシステム(信用システム)の一時的崩壊だとすれば、株式投資においてもこれまでの投資尺度が当面大きく変化してくると考えなければなりません。特にPERとか配当などの銘柄の選択尺度は経済環境の激変によってその企業をとりまく環境が変わりますのでこれまでの尺度が通用しないどころか、業績が一気に悪化するだけでなく倒産の可能性もあります。そうだとすれば現時点で業績とか配当とかのファンダメンタルズを重視することやチャートで単純に押し目を狙うという過去のテクニカル分析も意味をなさないこととなります。

投資の基本は「安く買って高くなったら売る」であり、この基本的な考え方をデイトレードのように目先売買で行うのではなく、全体相場を中長期変動(週足でのチャートの動き)でみて安くなったら買い、高くなったら売るということを実行することだといえます。下降相場であれ、上昇相場であれ、保ち合い相場であれ、その中で下げ続ける相場はなく、下げれば上がり、上れば下がるということをくり返します。ふつうは1年間に2~3回は週足での大きな上下動があります。この週足で下値ゾーン、上値ゾーンはチャートをみていればある程度はわかりますので、少し勉強すると個人でもチェックできることとなります。そういうまず何をかうのかの前にいつかうのかをまずチェックし、その後その時の相場環境に適応する銘柄を選べばよいということとなります。そのいつかうのかもピンポイントであてることは神様以外には誰もできませんので(特に相場は上にも下にも必ず行き過ぎということが起こります)3段階ぐらいに分けて買い下がることとなります。投資でリスクを少なくするには資金の分散投資と資金量の管理なのです。100の資金を持っていたらで25、で25、で25の配分もしくは10、20、40の配分で、どんな時でも25ぐらいの余裕をもたせておかなければなりません。誰もが予想しない事件(例えばアメリカの同時多発テロとか大統領暗殺など)が起こる可能性はあるのです。

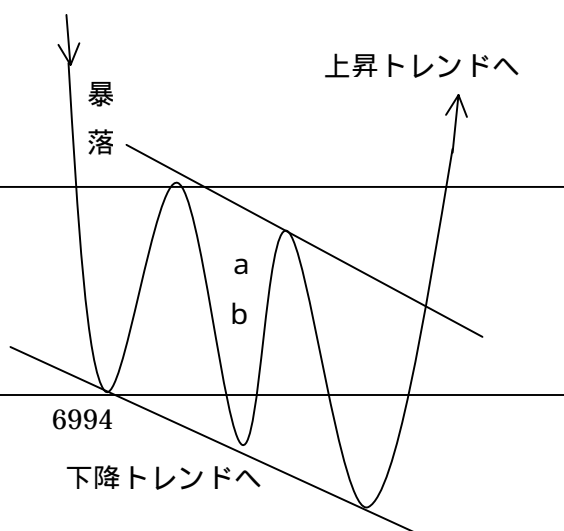
このレポートでの投資法は、一般のプロや雑誌で行われているような儲かる銘柄を捜し求めて的中させるマネーゲームのような投資ではなく(そのような投資は結局は全滅してしまっています)大底を確認していない現状では大底に向かって銘柄を分散して3回ぐらいに分けて買い下がり、それも3年ぐらいの期間で保有するというのが基本です。ただし、週足での中長期波動をみると年に2~3回は大きな上下動がありますので、その波動の上限に接近した時はアドバイスしますので、そこでいったん利益を確定して再び下がったところを買い直すという投資戦術もできます。

## 昨年の暴落後、考えられる相場のパターン

暴落後の保ち合い(ボックス)のパターン



暴落後の下降トレンドのパターン



と買い下がり、を買えずそのままいったん反発したら、a bで利益確定をする。そして再びと買い下がる、利益確定しない人は上下動があっても無視して、上放れして上昇トレンドに入るのを待つと長期保有する。

リスクを少なくする人は又はの水準まで下げるのを待つ。但し、そこまで下がらなかったらきっぱり諦めて次のチャンスを待つという心構えが必要。

と買い下がる。10/28の6994円を切ると下降トレンドを形成する可能性が高く、上値は押さえられる。aとbで利益確定して、次の下げを待つと買い下がる。上値は押さえられる形となるので、早目の利食いとなる。

下げても長期保有で割り切れれば下降トレンドであってもいずれ上にぬけて上昇トレンドとなってくる。

このレポートでは、低位株を と3つの買ポイントで出しており、リスクを少なくする人や資金に余裕のない人は日経平均の の昨年10/28の安値6994円の水準を待つとしていました。その可能性は1/22でNYダウの暴落暗示を分析してコメントしていましたが、待っていた人は7000円水準に接近した今週から買っていくということになります。しかし、現実にはここまで下がらなかったかもしれないわけですから、余裕のある人は の水準から少しずつ分散して買い下がるとしていました。投資家心理としては7000円水準まで待つことができる人は少ないと思いますので で買って で買う準備をしていた人がほとんどだと思います。一番いけないのは まで下がらないかもしれないと思って の水準で思い切って買ってしまった人です。 の買いチャンス又は の買いチャンスをなくしてしまったことになるからです。 の水準で買って20%ぐらい下がったので損切るべきかどうかという質問が数名の人からありました。 で買って を待つということは、現在の相場状況では当然下がってくるということが前提になっています。特に上述したように100年に1度の相場環境ですので、企業の業績は今後も悪化していくことになります、株価は当然下げてきます。このレポートが低位株中心であるのは、下げたにしても全体相場が上昇トレンドに転じた時の上昇率がすごいからです。倒産しない限り保有し続けるという心構えがあれば、上下動は気にしないことです。今回は100円以下のボロ株といわれるものの中から現在配当予定のある銘柄を選んでバックにしました。

**優良ボロ株セット(長期投資が原則です)**

コード・銘柄	市場	P B R	配当	3/5の 終 値	買いゾーン
1719 間 組	東 1	0.51	1.87%	80 円	70～80 円 60 円前後
3104 富士紡ホールディングス	東 1	0.57	2.94%	67 円	50～60 円前後 40～50 円
4611 大日本塗料	東 1	0.70	3.01%	84 円	70～80 円前後 60 円前後
5715 古河機械金属	東 1	0.79	5.47%	72 円	60～70 円前後 50 円前後
8074 ユアサ商事	東 1	0.70	3.22%	93 円	80～90 円 60～70 円台

一昨日、送りした西松建設は当日に小沢氏の献金問題が発覚し、事件化する可能性がありますので除外することにします。

**100年に1度の大不況の中で、金の上昇はなぜ起こる  
... 金を買ってみたい人は、産金株の代表である住友金属鉱山を ...**

2/23 は、NY 金先物相場は昨年3月の1オンス = 1030.80 ドル以来の1000ドルを突破し、1007ドルをつけていったん下落となりました。昨年の秋以降、主要通貨や信用リスク商品から安全資産として信用リスクのない金に資金を移す動きが加速しています。欧米各国の財政悪化懸念からドルやユーロなど主要通貨への不信感が台頭し、金は各国の中央銀行が外貨準備の一部として保有するなど通貨の性質をもつため「安全資産」として需要が拡大しているといえます。日本でも個人投資家が増え、国内で販売された地金(延べ棒)は昨年10～12月では前年同期比2.6倍に急増しました。

金は人類の長い歴史の中で、当初は物々交換の中から何とでも交換できる万能の商品すなわち貨幣として生まれてきました。そして、1914年までは「金本位制」といって金が人類の価値の基準でもありました。それぞれの国は金に裏付けされた通貨量しかを発行できませんでした。なぜ多くある金属の中で金だけがそのような万能の商品としての通貨という位置をもつことができたのでしょうか。原始時代は商品交換の場によくあられ、見た目に美しい、持ち運びに便利、分割できるなどの理由から誰もが喜んで受け取るものとして自然と金が通貨の役割をもつようになりました。

科学的に言うと金はどのような化学反応によっても変色したり消耗したりしない性質をもっています。金は1000度で溶解し他の物質と分離して純金として取り出すことができ、そのグラム数から算出される価格は世界共通となります。金はその特性として展性、延性にすぐれており工芸品には欠かせませんし、さらに鈴や銅に次ぐ高い電気伝導性があるため、半導体の配線やメッキに最適であり、ハイテク産業にはなくてはならない鉱物資源の側面もあります。「都市鉱山」と呼ばれているものは、都会で眠っているオフィスや個人の使用済みの携帯電話やパソコンの基板を大量に集め、それを溶かしてその中に使われていた金を取り出すことなのです。つまり都会に金脈があるということになります。

1914年にイギリスがアメリカに敗れたことで金本位制が崩れ、1944年7月に「ブレトンウッズ会議」でIMFと世界銀行の設立による世界体制ができ、「金1オンス(31.103g)は

35 米ドルと等しい」と決められました。つまり米ドルが唯一の金交換通貨(ドルでのみ金と交換できる)となりました。これを金ドル本位制といいます。次第に金が引き出されアメリカの金保有率が少なくなったところで、ベトナムの戦費をまかなうために多くのドルを印刷する必要性が生じ、ついに 1971 年 8 月 15 日アメリカは「金とドルの交換の停止」を発表しました。「ニクソン・ショック」といいます。これ以降アメリカは金の裏付けのないドル紙幣を自由に好きな量だけ印刷することができるようになりました。ドルが世界の共通通貨としてこれまで使われてきたのは、世界唯一の軍事大国であり経済大国であるという信頼があるためなのです。このアメリカのドル紙幣の氾濫の行きつく先が今回のサブプライムローン問題をきっかけとした 100 年に 1 度の金融不安といわれるものです。あふれ出たドル紙幣がマネーゲームを生み出し、その結果株式市場は暴落し、ドルは売られて急激な円高となりました。アメリカのドルへの不安はアメリカ国家への不信であり、そうなる信用できるものとして永遠の価値をもつ金ということになってきているのです。

世界的な不況で資産の逃避先として金に向かい金価格が上昇すると、それに連動して動く産金株の代表が住友金属鉱山です。2007 年の 7/23 の 3280 円の高値は世界的な好景気から、銅、鉄、ニッケルなどの資源が不足し、非鉄関連株が暴騰したことによります。その後はサブプライム問題をきっかけに世界の景気が悪化し、資源価格も暴落したことで、昨年 10/27 には 552 円までの暴落となりました。しかし、ここにきて金が急騰したことで、国内の金産出の 90% を占める鹿児島県の菱刈鉱山(高品位の世界有数の金鉱脈)をもつ住友金属鉱山が買われてきました。2007 年の 7/23 の史上最高値 3280 円から下降トレンド(A)を形成し、この中で昨年 10/27 に 552 円で 1 番底、11/20 の 597 円で 2 番底を打って、今年 1/7 に 1079 円の戻り高値をつけ、1/23 に 815 円まで押し目を入れて再上昇となり、NY 金先物が 1 オンス = 1000 ドルを突破した 1/23 には 1095 円の戻り高値更新となりました。その後、NY 金先物価格が下げ続けていることで、住友金属鉱山も本日は 31 円の 913 円で引けました。金価格はドルとの逆相関ですので、ドル高が続けば金は売られる展開となってきます。長期的には、ドル下落という見方が一般的ですので、それを前提にすれば金の現物を買うのもいいし、産金株の住友金属鉱山を買うのもいいということになります。但し、十分下げを確認してからの買いとなります。700 円台あれば買ってみるところです。

### < 3月の動きの想定 - 月末の株価はPKOがはいる可能性高い >

今週は週前半安くなって後半高くなれば、来週の SQ 日(3/13)に向かって NY ダウに大きな下落がない限り堅調な動きとしていました。本日は 7532 円まであって終値は 142 円 7443 円で引けました。2/27 の高値 7589 円を終値でぬけると 7700 円台の可能性がります。但し、NY ダウの暴落暗示の実現は終わっているわけではなく、下落途中の一服というところ。そのため昨日後場から上昇はあまり長続きせず来週堅調だとしても翌週から再び安くなり、7000 円を試す動きとなってくる可能性がありますので、買うのはじっくり少しずつ買っていくのがよいでしょう。但し、今月末は企業決算日であり、日経平均が 7800 円を下回ると金融機関の決算に大きな悪影響を考えると信用不安が起こる可能性があるため政府は月末の 7800 円水準を PKO によって維持しようとしています。そのため中旬以降、安いところがあれば買い場となってきます。

住友金属鉱山



07年の7/23の3280円を天井に、下降トレンド(A)を形成し、その中で08年の10/27の552円を1番底、11/20の597円を2番底にゆるやかな上昇トレンドライン(B)が引けました。ところが、ドルへの不信から金を買われそれに連動して日本での金の産出量の90%を占める菱刈鉱山を所有する住友金属鉱山が買われました。そして2/20(金)にNY金価格が1ドル=1000ドルの大台を回復したことで、週明けの2/23(月)にこの住友金属鉱山も1095円の戻り高値をつけました。東京の金市場は3000円の大台を回復しました。しかし、ここから急激なドル高となってきたことで、ドルと逆相関にある金は売られ当面ドルのチャートを見るとドル高方向にあることから金はしばらく調整となりそうです。しかし、長期的にみると世界経済の回復には時間がかかりますので金の上昇は続いていくことになります。ということはこの住友金属鉱山が大きく調整すれば、金を買いたいと思っている人はこの銘柄を長期保有するのも1つの考えです。景気がよくなれば金価格が上昇しなくても、資源関連株として買われてくるので金よりも儲かる確率は高いかもしれません。3/3に917円で売転換が出現しましたので、850円前後、800円前後、750円前後、700円前後が買いポイントとなります。